セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報

The Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.57

編集・発行　佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日　2021. 3. 17

〒844-8585佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

https://saga-museum.jp/ceramic/

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp

〈灰釉彫文茶碗　銘 玄海〉

肥前

1580 ～ 1600年代

九州陶磁文化館所蔵

髙取家コレクション

佐賀県重要文化財

現在の唐津市北波多の飯洞甕窯跡で類品が出土しており、唐津焼の草創期に生産されたことが明らかになっています。高台は浅く３段に削り出し、外側の畳付の幅が狭くなります。茶碗の下から上へ大きく弧を描くように連続して彫が交差し、波頭が海面を進むような躍動感があります。胴部から口縁にかけて捻りながら輪花状に歪ませた器形は波頭に動きを加えます。淡くアイボリーを帯びた灰釉の気泡は波飛沫のようにみえます。

～令和３年度 企画展のお知らせ～

企画展

寄贈品名品選（仮）

○開催趣旨

昭和55年（1980年）に開館し、現在に至る当館は、開館以来九州の陶磁器の調査研究・展示・普及をめざし、資料を収集してまいりました。昨年、開館40周年を迎え、本年の11月で41周年となります。

当館の収蔵品は令和２年（2020年）３月時点で、15,287件28,938点となりました。これは、開館以来、多くの陶磁器コレクター、陶磁器ファン、陶芸家の御支援によって、購入品以外にも、質の高い貴重な寄贈品をいただいたことによります。

このたび、貴重な寄贈品のなかから、優れた陶磁器作品や特徴ある陶磁器を御紹介し、多彩な当館の陶磁器資料を公開いたします。あらためまして、当館に資料を御寄贈いただいたみなさまに感謝申し上げます。

染付山水文輪花大皿
肥前 有田　1640 ～ 1650年代
今泉吉郎氏寄贈
重要文化財

○主　　催　佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場　佐賀県立九州陶磁文化館
　　第１・２展示室
○会　　期　令和3年(2021年)10月８日(金)～
　　12月12日(日)　57日間
○休 館 日　月曜日
○出 品 数　100件（うち重要文化財１件
　　佐賀県重要文化財３件）予定
○観 覧 料　無料
○展示構成
　第１章　佐賀の陶磁器（唐津・有田・鍋島など）
　第２章　九州の陶磁器
　　（福岡・長崎・熊本・鹿児島・沖縄）
　第３章　現代陶芸作品
　第４章　中国・韓国の陶磁器
○展示される寄贈品（主なもの・予定）
　柴田夫妻コレクション
　髙取家コレクション
　中島宏コレクション
　白雨コレクション
　柴澤コレクション
　今泉吉郎・吉博コレクション
　青木龍山作品
　澤田痴陶人作品
　森正洋作品
　松本佩山作品
　有田田代家寄贈品

灰釉彫文茶碗　銘 玄海
肥前　1580 ～ 1600年代
髙取家コレクション
佐賀県重要文化財

鉄絵緑彩松樹文大皿
肥前 武雄　1620 ～ 1640年代
中島宏コレクション
佐賀県重要文化財

～令和２年度 企画展の報告～

開館40周年記念・寄贈記念　特別企画展

髙取家コレクション

唐津の炭鉱王、髙取伊好氏と志那夫人、嗣子の九郎氏は、炭鉱経営で成した財を投じ地域の発展に尽力しました。その社会貢献は、文化・観光振興、唐津焼の再興支援まで多岐にわたります。伊好氏は唐津城本丸の西南の地に日本有数の近代和風建築である邸宅（重要文化財「旧高取家住宅」）を建てると、お膝元である肥前を中心とした国内外の上質なやきものを集めて、全国からの賓客を茶会や宴席でもてなして交流の場としました。

展覧会では、このたび当館へご寄贈された648件1,700点と、昭和61年（1986）にご寄贈頂いた１件１点、平成19年（2007）にご寄贈頂いた540件1,727点を合わせた総数1,189件3,428点の旧高取邸の陶磁器の中から、古唐津茶碗「玄海」（佐賀県重要文化財）をはじめとする茶陶や古伊万里、鍋島など多彩な作品をご紹介しました。

○主　　催　佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場　佐賀県立九州陶磁文化館
　　第１～３展示室
○会　　期　令和２年（2020年）５月23日（土）～
　　７月12日（日）　44日間
○休 館 日　月曜日
○出 品 数　190件434点
○観 覧 料　無料
○展示構成
　第１章　肥前・佐賀の陶器
　第２章　肥前・佐賀の磁器
　第３章　鍋島
　第４章　長崎の陶磁器：対州、現川、三川内、長与、亀山
　第５章　九州・沖縄の陶磁器：高取、上野（福岡）、八代、小代（熊本）、薩摩（鹿児島）、壺屋（沖縄）
　第６章　本州の陶磁器：萩（山口）、備前（岡山）、源内（香川）、楽、永楽（京都）、三田、東山（兵庫）、瀬戸（愛知）、美濃（岐阜）
　第７章　中国の陶磁器：龍泉、景徳鎮、華南三彩、漳州、宜興、徳化ほか
　第８章　朝鮮の陶磁器：鉄絵、象嵌、染付、辰砂、青磁、白磁
　第９章　東南アジア・ヨーロッパの陶磁器：ベトナム、デルフト、ペトルス・レグ―（オランダ）、ドルトン（イギリス）

御道具取り合わせ

鉄絵蒲公英文茶碗
肥前　1590～1610年代
髙取家コレクション

染付蓮束文大皿
中国 景徳鎮　15世紀第1四半期
髙取家コレクション

～令和２年度 企画展の報告～

開館40周年記念・寄贈記念　特別企画展

柴澤コレクション

佐賀県立九州陶磁文化館は、昭和55年（1980年）11月１日に開館し、令和２年（2020年）に40周年を迎えました。開館以来、肥前地域を中心とする九州の古陶磁について調査研究を進めた実績が所蔵者・蒐集家の信頼につながり、柴田夫妻コレクションをはじめ多くの古陶磁を寄贈いただく契機にもなりました。

この展覧会でお披露目した「柴澤コレクション」も館の活動の中で寄贈の契機を得たコレクションです。

故 柴澤一仁（しばさわかずひと）氏は、新潟や山形に伝わった江戸時代の肥前磁器（古伊万里）の探求・蒐集に約45年にわたって情熱を注がれました。平成28年（2016年）に寄贈いただいた砂目積（すなめづ）み小皿（こざら）等の貴重な作品２件８点と、平成30年（2018年）に急逝された後、生前の意思により令和元年（2019年）に遺族から寄贈された430件1,171点の作品を合わせて、432件1,179点が柴澤コレクションとして当館に所蔵されることになりました。

○主　　催　佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場　佐賀県立九州陶磁文化館
　　第１～３展示室
○会　　期　令和2年（2020年）10月16日（金）～
　　12月13日（日）51日間
○休 館 日　月曜日（11月23日（祝）は開館、11月
　　24日に休館）
○出 品 数　432件1,179点
○観 覧 料　無料
○展示構成
　第１章　肥前磁器の創始と確立
　第２章　日本的磁器の完成と展開
　第３章　国内市場の拡大と普及
　第４章　磁器需要の増大と産地間競合
　第５章　中国の磁器
○展示解説　学芸員によるギャラリートークを毎週土
　　曜日に開催。

染付花唐草文小皿
肥前 有田　1610～1630年代
柴澤コレクション

展示風景

展示風景

～令和2年度 特別企画展の報告～

新収蔵品展

佐賀県立九州陶磁文化館で令和元年度に寄贈受入や購入により新たに収蔵した陶磁器作品の中から、47件（ 292 点）を展示公開しました。

公開作品には、昨年度当館で[有田×野老]展として開催し、好評を博した美術家：野老朝雄氏の創作による現代の有田磁器など、新しい収蔵資料を改めて展示しました。

このほか、江戸時代初期に有田で製作された初期伊万里をはじめ、幕末期から明治期までの有田焼など佐賀の陶磁器を中心に、近世から現代までの陶磁器作品をお披露目しました。

○主　　催　佐賀県立九州陶磁文化館
○会　　場　佐賀県立九州陶磁文化館
　　第１展示室
　　（一部の作品は別の展示室）

○会　　期　令和２年（2020年）９月５日（土曜日）
　　～令和２年（2020年）10月４日（日曜日）
　　26日間
○観 覧 料　無料
○出 品 数　47件292点

染付吉祥字斜格子文碗
肥前 有田　1610 ～ 1630年代
廣井孝夫氏寄贈

ARITAYAKI RHOMBUS WORKS
野老朝雄（有田 李荘窯業所）2019年

PPP TOKOLO PATTERN TILES
野老朝雄（有田 李荘窯業所）2019年

色絵蒔絵花鳥花唐草文大皿
肥前 有田 1840 ～ 1870年代
山口智也氏寄贈

色絵亀甲割鳳凰文大花瓶
佐賀県 有田 南里嘉十
1870 ～ 1880年代
南里裕美子氏寄贈

染付唐草文皿
肥前 亀山 文政四年（1821年）
寄贈品

調査ノート

有田磁器に描かれた鷲の文様

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問）

図1 色絵鷲文大皿
肥前 有田　1700 ～ 1740年代　口径54㎝
柴田夫妻コレクション

江戸初期から鳥の文様を描いた有田磁器であるが、ワシタカ類の鳥を描くものはかなり限られている。しかも国内向けでは稀であり、欧州向けの中でみられる。従来紹介されてきたものでは、鷲置物（OCS1990の図172）であり、人形類の一つとして作られたものがいくらか伝世している。1680 ～ 1700年代とする。17世紀末頃の欧州向けの壺の蓋などには獅子つまみはあったが鷲はこれが初めてであった。18世紀に入っても獅子や鳳凰を文様として描いた色絵が多い。国内で龍や獅子は柿右衛門様式時代にも多く描かれたが鷲鷹を文様として描くことはなかった。

日本の政治権力の頂点にいた徳川将軍は家康から3代家光にかけては鷹狩りを好んでいたのに対し、５代綱吉は生類憐みの下、殺生禁止令により鷹狩り制度を廃した。30年ほど鷹狩りは途絶えたという。それを復活したのが８代将軍吉宗であり、鷹狩りを好み享保7年（1722）に鷹匠頭を布衣としている。有田で国内向けには鷲鷹文様を描かなかったのも、こうした将軍の鷹狩り制度と関わりがあるのかどうかはわからない。

しかし、欧州向けに注文を受けたためと考えられるが、有田で鷲の置物を作り、さらに、18世紀前半に鷲を描き込んだ色絵磁器が作られた。当時、鷲を紋章にもつ王侯貴族は、ブランデンブルク・プロイセン王家やロシア王家など、神聖ローマ帝国に関連したヨーロッパ諸国でみられた。中でも代表的な皇帝家であるハプスブルク家の紋章「双頭の鷲」が知られ、1740年にハプスブルク帝国の女帝となるマリア・テレジアが活躍する。

図１の大皿は雉を捉えた鷲を描き、鷲は２羽である。大皿では大阪市東洋陶磁美術館所蔵品にもあり、口径54.7㎝の大皿（読売2014図175）であり、見込にフラワーポットを配したヨーロッパ向けの意匠である。ポットの両側に岩にとまる鷲を描く。似たフラワーポットをはさんで木の棒の上にとまる鷲と思われる鳥を描く口径35.1㎝の大皿がフロニンゲン博物館所蔵品にある（図２）。同じものがロシア・エルミタージュ美術館にある（口径35.2㎝、日文研1993図990）。これらの大皿は意匠の特徴から、カール６世（皇帝在位1711 ～ 1740）の時代に当たると思われる。ワシタカのつまみを持つ壺はフロニンゲン博物館所蔵品にある（図３）。

図４の壺も２面（ａとｃ）に鷲を描き、他の１面（ｂ）には走って逃げる兎を表す。こうした地を色絵の黒で塗り埋める有田磁器の壺瓶類は、ウィーンに鯉の滝登りと獅子牡丹文の角瓶の例が典型的なものとしてあるが、マリア・テレジア時代に多い特徴といえる。おそらくは漆器の黒の雰囲気を磁器で表そうとした可能性が高い。マリア・テレジアの父カール6世がネーデル

図２ 色絵鷲文大皿
肥前 有田　1700 ～ 1740年代　口径35.1㎝
Groninger Museum, the Netherlands

図３ 色絵鷲つまみ蓋付大壺
肥前 有田　1700 ～ 1720年代　高36.5㎝
Groninger Museum, the Netherlands

図５ オランダ・アムステルダム地下鉄南北線遺跡出土
Monumenten en Archeologie Amsterdam,
The Netherlands (NZR2.00459CER01)

ランド（現ベルギー）オーストリア東インド会社を創設（正式認可は1722年）して海外貿易に乗り出す。しかし英蘭の要求でマリア・テレジアの帝位継承と引き換えに会社は解体された。図4の鷲文大壺がオランダを通して渡ったことを示唆する資料がアムステルダムで出土している（図５：図４と同様の壺の肩部の破片）。また、有田の鷲鷹文様の磁器とハプスブルク家との関りを物語る例は、現在ウィーンの宮殿に銀の縁飾りを施した色絵皿がセットで残る（ササキ企画1997）。見込は邸内に婦人が顔をのぞかせる図を描き、その側面の左右の窓内に鷲を描く。色絵の特徴からマリア・テレジア時代の可能性が高い

本稿の執筆にあたり次の方々に御協力を賜った。
Akemi Kaneda　Christiaan.J.A Jörg
Monumenten en Archeologie Amsterdam, The Netherlands
（https://belowthesurface.amsterdam/nl）
Groninger Museum, the Netherlands

参考文献

国際日本文化研究センター 1993『エルミタージュ美術館所蔵日本美術品図録』
ササキ企画 1997『マリア・テレジア古伊万里コレクション展』
読売新聞大阪本社 2014『Imari/伊万里　ヨーロッパの宮殿を飾った日本磁器』
Jörg/ C.J.A 2003 “Fine & Curious”
Oriental Ceramic Society 1990 “Porcelain for Palaces”

図 4a・4b・4c 色絵鷲文大壺
肥前 有田　1720 ～ 1750年代　高40.5㎝
柴田夫妻コレクション

肥前陶磁の見どころシリーズ（2）

古伊万里の景徳鎮写し －カンナ痕にみる陶工の意図－

図1　中国景徳鎮 1620−1640年代
口径16.0
柴田夫妻コレクション

図2　肥前有田 1770−1800年代
口径21.8
柴澤コレクション

肥前磁器は1610年代に生産がはじまると、江戸時代を通じて先行する中国磁器（図１）を目指した（図２）。1640年代以降、中国の明朝と清朝の王朝交代に伴う内乱によって中国磁器輸出が激減してからは、景徳鎮磁器の代替品として肥前磁器に国内需要が高まり、成形も景徳鎮磁器のように高台径を広く削り出す器形が主流となった。

明末の景徳鎮磁器（図１・３）や17世紀後半の肥前磁器の一部には、高台際に放射状のカンナ痕が残る場合がある。通常、高台の削り出し後、更にカンナをかけて平らに調整するため、残っても同心円状の調整痕だけかすかに見える場合が多い（図４）。しかし、稀に調整を行わず放射状のカンナ痕だけ残る製品や、調整し損ね高台際の深いカンナ痕の部分が残る製品もみられる。

1680年代に清王朝が中国統一を果たし中国磁器輸出が再開すると、次第に海外市場が奪還された。18世紀以降、肥前磁器は需要の拡大する国内市場に生産力を振り向けた。国内で根強く残る中国磁器需要にも応え、より精巧な明清朝の景徳鎮磁器の模倣品を作るようにもなった(注)。それらの中には意図的に放射状のカンナ痕を残す製品が現れる。18世紀前半には高台削りの際に深く放射状のカンナ痕を入れ、調整は高台の中心部だけ行う例（図５）、18世紀後半には、調整後更に高台際から中心にかけて放射状のカンナ痕を渦巻状に幾重にも装飾する例がみられる。類品の陶片が有田の樋口窯跡から出土しており、南川原山で類例が出土する伝世品のなかにも同様のカンナ痕の製品がみられる（図６）。

冒頭の染付花鳥文輪花皿（図１）のカンナ痕は後者のタイプであり（図７）、箱書には安永４年（1775）京都で入手した後、明末の中国磁器とのお墨付を得たことが記されている。陶工の意図は見事に伝わったのである。　（山本文子）

本稿の執筆にあたり次の方々に御教示頂いた。
大橋康二　川端正美　鈴田由紀夫　徳永貞紹
村上伸之　村島昭文

（注）18世紀以降、肥前磁器の高級品は明末清初の中国磁器の影響を受ける製品がみられ、18世紀後半には清朝磁器の新たな銘も加わるが（大橋 1988）、同時に明朝の影響も強まることが指摘されている（村上 2005）。

参考文献

大橋康二 1988「18世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』6号
村上伸之 1999「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』№.19

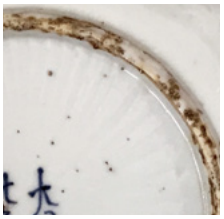

図3（図1の底部）

図4 長吉谷窯跡出土

図 5a・5b 絵寿字花唐草文六角皿
1700−1730年代（02890）
柴田夫妻コレクション

図 6a・6b 染付樹木鳥詩句人物文輪花小皿
1760−1780年代（05543）
柴田夫妻コレクション

図7（図2の底部）